CHAOS!!

狛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＡＯＳ！！

【Ｎコード】
Ｎ８３１９Ｙ

【作者名】
狛

【あらすじ】
元番長でヤンキーだった黒崎真冬（♀）、現不良でツンデレな早坂、俺様何様鷹臣様の佐伯鷹臣、忍んでる由井忍、思考メルヘンな緑川学園の番長・桶川饗太郎。その他もろもろ、気付いたらＢＬＥＡＣＨの世界へ。巻き込みつつ巻き込まれる派茶目茶ストーリー！（たぶん！）俺様ティーチャー×ＢＬＥＡＣＨのクロスオーバー小説です。

#1．始まり（前書き）

突発的に書きたくなりました。

ゆっくり書いていこうと思います（＾＾）

ギャグセンは低いのでご注意を！

#1. 始まり

拝啓、母上様。

一人暮らし始めて、ようやく朝食を作れるようになってきたこの頃です。

「続いては今日の占いカウントダウン！！」

朝七時ジャスト。

テレビの前に朝食（カップラーメン）をセットして、画面に食い入る。

「今日のワースト1は射手座のあなた！ミラクルが起きすぎて全体的に不幸な日。刃物と袴に注意して下さい」

ぼろっと箸が口から落ちた。

「注意って……どう注意すればいいのさ……」

――――

キーンコーンカーンコーン

朝の不吉（？）な占いから、学校に来てボーっとしてたらいつの間にかお昼休み。

椅子に座りすぎてお尻が痛いな☆なんちて。

とりあえず、マイフレンドの早坂くんに占いのことを相談してみる。

「そりゃ、手を切らねーよーにすりゃいいんじゃねーの？」

早坂くんは金パで不良のくせして、実はすごい生真面目さん。

私より頭がいいなんてちょっとジェラシー。

「じゃ、じゃあ袴は！？」

「剣道部に注意とか」

「なるほど！」

なんかあれだね。こういう会話、ザ・女子高生！みたいな！
やんちゃ（番長）してた頃なんか、会話が
『真冬さん！西校が攻めてきた！』
『真冬さん！桜田のパンツウサギでした！』
『真冬さん！ぜひ縛ってください！それはもうきつく！！』
な感じだったしねぇ。
ちなみに真冬は私で、桜田ってのは西校の番長ね。
私が見たのはハートのパンツだったなぁ。

「あ、そーだ。佐伯が、今日の部活は外に行くって」
「なんで？」
佐伯センセー、もとい佐伯鷹臣は我等が顧問、かつ私の幼なじみ。
私がやんちゃするようになったのって全部この人が原因で。
鷹臣くん、学生時代は番長で関東統一してました。

そして、私達が入ってる部活っていうのは……

「それはもちろん俺のことも呼んでくれるだろうなぁ！？」

「由井、いたのか」

「忍者どっから出てきたの！？」

「ふっ……俺にかかればこんなのちょちょいのちょいさ！！」

「いや、校舎改造しちゃまずいだろ」

……うん、私達、風紀部。

この眼鏡かけた残念な人が由井忍って忍者野郎で。

とにかく神出鬼没。

キーンコーンカーンコーン……

「あ、トイレ行くの忘れた」

「「……」」

――――

あっという間に放課後！

学校から出て、私、早坂くん、鷹臣くん、忍者の順に並んで歩いてます。

「ねぇ、今日は何するの？」

「あ？警察に行くんだよ」

け、警察だと……！？

「鷹臣くん何しでかしたの！？人！？人殺したの！？」

「それで鷹臣くん！暗殺はどのように行ったんだい！？」

「いいから黙ろうか」

鷹臣くんに殴られる。

ゴツン、というかゴキャッみたいな音。

小さい頃から殴られ慣れてるけどやっぱ痛いよ！！

忍者もゴロゴロ転がってるし！

「でもなんで警察なんかに行くんだ？」

「家の鍵を落としてな。拾われてねぇか確かめに」

「それだけ！？」

「それだけとはなんだ、真冬。部屋に入れねぇんだぞ、寒みいだろうが」

「だからってなんで私達まで！？なんか私達が悪いことしたみたいじゃん！！」

「いいじゃねぇか。どうせ暇だろ」

うっわ、事実なだけに反論できない！

でも警察なんて行きたくない。私、前科（喧嘩してたら逃げ遅れて捕まった）あるしね！

「あ、モールス」

と、前から来る見慣れた人。

「あー、番長じゃないですか！」

番長の桶川饗太郎。コンクリ粉砕できる鉄拳の持ち主で趣味はモールス。

私も趣味モールス。

ビバ・モールス仲間！！

そして番長はねこまたさんていう、よく分からないキャラクターが大好きです。

思考がメルヘン。

「番長、こんな時間に何してたんですか？」

「いや、映画を観に」

なるほど、ねこまたさんの映画ねきっと！

「てめぇらは何して――」

その時だった。

「キャー！！」

通行人みんな、私達の頭上を見て、誰かが叫んだ。

「な、なに！？」

あ、やばっ。

鉄骨――

ガシャアアアアン！！

はい、気を失いました。

……ってなにこれ！！

占い外れてんじゃん！！

私のシャイニンな高校生活は！？

死んだの？私死んだの！？

何とか言いってよ！ジョニー！

「――っは！」

目が覚めた。

あれ？夢……？

「あ、起きた」

「ほんとだ！」

私の顔を覗いてるお二人さん。一人は黒髪に一人は茶髪の女の子。

シャ、シャイニン！

「あたし親父呼んでくる」

「あたしも行くー！」

走っていく姿を可愛いなぁ！と思いつつ。

ここはどこなんだ！

「あれ、あんた起きたのか」

ガチャっと入ってきたのは同い年くらいの男の子。

髪がオレンジ色だ……

もしかしてヤンキーなのかな？

「言っとくけど、コレ自毛だからな」

なんか早坂くんに似てなくもない……気がしなくもない。

「俺は黒崎一護。あんたの名は？」

な、

「もしかして生き別れのお兄ちゃん！？」

「なんでそうなるんだよ！！」

「い、痛い！！怪我人をぶっちゃいけないんだよ！！」

「あ、悪りぃ……で、あんたの名前」

「黒崎真冬。よろしくね！お兄ちゃん！」

「誰がお兄ちゃんだー！！」

拝啓、母上様。

なんか面白いことになりそうです。

#1．始まり（後書き）

とりあえず始まりました。

それぞれキャラの個性をうまく書けたらいいな。

自己紹介しちゃうゾ☆（前書き）

俺ティーのキャラ紹介。

自己紹介しちゃうゾ☆

Ｎｏ．１　黒崎真冬（♀）

緑川学園一年生。

前の学校（東校）では番長だった。
きっかけは、小学生の頃から幼なじみで当時の東校番長だった佐伯鷹臣に引っ付いていたから。何回殴られても（骨折しても）付き纏うという異常な執着ぶりに、鷹臣も恐怖を感じたらしい（本人は覚えていない）。

ある日、「県統一したぜやっほーい！Ｂｙ子分」と喧嘩直後にその場で真冬を胴上げしてたら警察が登場。
子分達に置いてけぼりくらって見事パクられましたとさ。

転入した緑川学園でのモットーは『喧嘩しない。ビバ・女子高生☆』だったのに、鷹臣（担任）のせいで風紀部に入り影で学校の治安を守ることに。

ちなみに初動は番長潰し。

表ざたに喧嘩ができないので（元番長とは知られたくないから）、裏風紀部員として、うさちゃんマン（うさぎの仮面つけただけ）と夏男に変装して活躍することも。

『いちごラブ』さんと文通していて、ペンネームは『スノウ』。伝書鳩はジョセフィーヌと命名。

No. 2　早坂

真冬と同じクラスで席がお隣りさん。

金髪で喧嘩大好き！な性格のため、喧嘩売られるわ怖がられるわで一匹狼（真冬いわく一人ぼっち）。

でもすごく真面目ちゃんで、予習は欠かさず授業も毎日出てる。真冬といざこざがあって、真冬を避けるために授業を休んだこともあったが、勉強が遅れるのが心配すぎて結局学校で予習してたという（笑）

手先が器用。手芸部（マッチョ部）からのお誘いも多々ある。

うさちゃんマンに憧れを抱いてる。うさちゃんマン大好き。でも夏男はホモなのではないかと恐れてる。ちなみに真冬は変な子と認識。

今まで喧嘩は売るし買ってたけど、うさちゃんマンに説教（？）されて、喧嘩は売るだけになった。

喧嘩スタイルは攻撃のみで、避ける・防御は格好悪いと思っていた。それを見兼ねた夏男（真冬）が受け身を教える。でもただの前転に

なる。

かっこいい戦い方が好き。少年漫画みたいな。マッチョになりたい。修業すればスーパーサイヤ人みたいになれると思ってる。

Ｎｏ．３　佐伯鷹臣

真冬と早坂の担任兼顧問。数学の教師。

昔は東校の番長で関東を統一していた。その頃から真冬は手下みたいな、パシリみたいなポジション。周りに影響されやすい子供だった（『エースをねらえ』や『アタックナンバーワン』とかの影響でいきなり修業し始めたり）

なんだかんだ言って真冬のことは信頼してる。

実は真冬が住んでるマンションのお隣りさん。

学校の生徒みんなから恐れられてるすごい人。

やくざも潰しちゃったりします。

Ｎｏ．４　由井忍

真冬達とはクラスが違うが、風紀部のためしょっちゅう遊びに来る。かなり忍んでる。けど忍べてないから普段の方が存在感が薄くなる。主従関係に憧れてる。元生徒会で風紀部を偵察するため風紀部に入部した。そのとき生徒会をやめる。それでも主人は生徒会長。頭はいいはずだけど、ある意味真冬より頭が悪い。鈍感。どうでもいいことに一生懸命。

手裏剣を常備。

Ｎｏ．５　桶川饗太郎

緑川学園の番長。コンクリ粉砕可能。

趣味はモールス信号。風紀部の活動で番長潰しに来た真冬となんだかんだで仲良くするうち、真冬にドッキーン！てなる。

真冬のイメージは男前。馬に乗ってる感じ。

夏男に負けて一度番長ではなくなるが、いろいろあって復帰。その

時に夏男の正体が真冬だと知る。

“ねこまたさん”という、三等身で男爵ヒゲ生やした猫のキャラクターにお熱。

自宅謹慎中に真冬と映画を観に行って号泣したほど（観てた周りの人はみんな爆睡）。

『スノウ』と文通仲間。ペンネームは『いちごラブ』。伝書鳩を豆吉と命名。

自己紹介しちゃうゾ☆（後書き）

次から本編入ります！

あなたのお宅にお邪魔します。

「初めまして、黒崎真冬です。こんな見ず知らずの私を匿ってくれるなんて嬉しいな……！妹が出来てちょっぴり緊張するけど、みんなとなら仲良くしていけると思うの！これからよろしくね！」

どうだ、この予行演習！完璧でしょうよぉ！

「帰れ」

「ひ、ひどい！！いたいけなレディーに向かって何を言うの！」

「どこがいたいけなんだよ。つーか、さりげなく居座るつもりか」

「うん」

「『うん』じゃなくて……」

ため息をついて頭を抑える一護くん。

だってしょうがないじゃんか。ここがどこか分からないし、早坂くん達いないんだもん。

にしても空座町ってどこ？

「連れもいねぇって言うし……どうすりゃいいんだよ」

あ、一護くん困ってる。

よし、今のうちよ！

「てことでご家族に挨拶してくる！！」

「あ！待て！」

部屋を飛び出そうとドアに駆け寄ったら、私が開ける前にドアが開いた。

「いっちっごぉおおお！！」

「ぎゃあああ！！」

ひ、ヒゲ面のオッサンが飛び込んできたよ！！

このままだと顔面衝突してしまうわ！

頑張るのよ真冬！元ヤンキー魂を見せるのよ！

私はぎりぎり横に飛びのいた。

「ふっ、私にかかればこれしきゴハッ」

「うわ！このクソ親父！！おい、真冬！大丈夫か！？」

ま……まさか飛んだ方向に壁があったなんて……

「だ、大丈夫。問題ない」

「いや、頭から血ィ流れてっから」

そう言って消毒液とガーゼを持ってくる。

……うん、なんか照れる。

「女なんだから気をつけろよ」

わぁお、早坂くんと同じようなこと言う。やっぱり似てるよ。

「親父！」「お父さん！」

開いたドアからさっきの女の子達が入ってきた。

ああ可愛いな！この子達双子かな？

「あんた大丈夫！？」

「お父さんがごめんね！？」

私、思ったよ。

ここの家族はみんな優しい。

黒髪の子も茶髪の子も、なんだかんだ言って一護くんも心配してくれる。

「……？おい、真冬……？」

なんだか、泣けてくるよぉ！

「真冬ちゃんて言うんだ！あたし遊子！で、こっちが夏梨ちゃん！」

「よろしくね」

「よろしく！私のことは“真冬お姉ちゃん”て呼んでね！」

――――

あの後、一護くん達にあらましを説明したんだけど、みんな微妙な顔をしていた。

まぁ、そうだよね。鉄筋が落ちてきたのに無傷だし、私一人だけがこの家の前に倒れてたらしいし。

どういうことなんだろう。

「一護くん、それで私達はどこに向かってるの？」

「下駄帽子のトコ」

誰よソレ。

「おーい、浦原さんいるか？」

一件の家の前で止まった。駄菓子屋さんかな？『浦原商店』て看板がある。

遠慮なく引き戸を開けた一護くんの背中から中を覗くと、なるほど、下駄帽子がいた。

「おや、黒崎サンじゃないスか。どうしたんです？」

「こいつの連れが迷子らしくて。何か知ってるか？」

ぐい、と前に押し出される。

見るからに下駄帽子。不審者に見えなくもない。

「アナタお名前は？」

「黒崎真冬です」

……うーん。

この人、胡散臭い空気出してるけど強い。

なんとなく分かる。

そういう人の前だとなぜか固くなってしまう。

「奇遇ですね。ちょうど先程、井上サンが貴女を捜している人を連

れて来まして」
「ほんと！？」
「ええ、奥にいますよ」
誰だろう？早坂くんかな？
「お探しの方が見つかりましたよ」
ガラッと襖を開けると、
「わっ、崩れちゃった！」
「よっしゃあああ！！次は俺の番だぜ！！」
「なに！させるかぁああ！！」
「おまえら俺に勝ったら赤点にするから」
「お、モールス」
なんでみんな集合してんの？
なんで将棋崩し？
え、私だけ仲間割れだったパターン？

しかも気付いてくれたの番長だけだ！

「あれ、黒崎。大丈夫だったか？」

「〜〜〜っ、早坂くぅううん！！」

「だー！来んじゃねぇ！！ていうか由井も便乗すんな！！」

「なぜだ！黒崎はいいのに俺はダメなのか！？」

「てめぇら離れろ！！！」

「お、桶川！？落ち着け！」

「おまえらが落ち着けよ！！」

一護くんが怒鳴って、一斉に動きを止めた。その間に超シャイニンな女の子の隣をキープ。

か、可愛い……

「てめぇ誰だ？」

ちょ、番長……いきなりメンチ切っちゃだめでしょ……

「誰だっていいだろ。それより浦原さん、こいつら……」

「ええ、アタシもちょうど言おうと思ってたところっス。この人達はどうやら別の世界から来たようですねぇ」

……

……

はぁ！？

「あたしの目の前にいきなり落ちてきたから、きっとそうだよ」

お隣りの超シャイニンガールがそう言った。

な、なんてこったい！

私達、有名人になれるじゃない！

でもそんなことってありえるの？

いや、ありえなかったらこんな事になってないんだけどね！

「いつ戻れるか分かりませんし、霊圧もそこそこ高いようなのでアタシ達で面倒見ましょう」

そんなこんなで、私は一護くんの家に泊まらせてもらうことになった。

あなたのお宅にお邪魔します。（後書き）

真冬は黒崎家に、早坂と由井が石田家に、番長が茶渡の家に、鷹臣くんが浦原商店に配属されました。

石田と茶渡は完璧巻き添いですｗｗ

キューピッド（前書き）

織姫と真冬の話。

※今回から短篇みたいな感じの小話を完結しながら進みます。

キューピッド

好きな食べものを合わせれば、もっと好きになると思うの。

私の隣にいる超シャイニンガール。

髪が綺麗な茶色で、目もぱっちり二重で。

女の子っていい匂いするしふわふわですぐ壊れそうで天使みたいって思っていたけど……

この子はまさに女神！女神ってホントにいたのね！

しかも名前が織姫なんて、見たまんまじゃないの！

もう可愛すぎて顔の筋肉が緩みまくりだ。

「真冬ちゃん達はどこから来たの？」

「それはあなたの心の中かゲフッ！！」

「馬鹿かおまえ」

「ひ、酷いよ鷹臣くん……言うくらい別にいいじゃんか……」

エルボー痛い……

ついでに私の心も痛い。

早坂くん達ならなんだかんだでノってくれるのに。

もうそんなピュアな少年魂は持ち合わせていないとか？

まあ年齢不相応にオッサンみたいだし。今時の二十代みたく若くないし。サングラス掛けただけでヤクザだし。

いや、サングラスは番長も同じだけど。

「あっ、そうだ！あのね……」

いきなり女神様が手をお打ちになられた。

そのまま細い指を組んで津々と語りはじめる姿が可愛い、超可愛い。

「実は昨日夢で真冬ちゃん達を見たの！」

「ほんと！？　それって相思相あブッ」

「続けてくれ」

「うん」

痛いよ！話してる時にやるなんて鬼畜だ！

しかも『うん』て……

「それでね、真冬ちゃん達と一緒に鬼ごっこしてたんだけど、誰が黒崎君をノックアウトできるか競争になって、アベベが飛んできたの！」

……うん？

「そしたら真冬ちゃんが逆立ちで大食い選手権始めたから、あたしがチョコ明太を作ってあげたんだよ！」

……なんでだろ、言ってることが理解できないゾ☆

「あ、もしかしたら真冬ちゃん達じゃなくて隣に住んでるおじいさんだったかもしれない」

ちょっと待って、おじいさんと私を見間違えるって……え？あれ？

なんか目から汗が……

「ふ、ふぅん、すごい夢を見たんですね！」

「でしょ？で、実は続きがあって……」

続くのかい！！

＊＊＊

「お、おい真冬、大丈夫か？」

「……ん……？あれ？一護くんだ。あ、夢か」

「いや、夢じゃねえから！！　どんだけ現実逃避したいんだよ！」

「フフフ……そんなことなくてよ。織姫ちゃんは女神なんだから！」

「意味分かんねえ……」

「そだね」

今のは自分でもよく分からなかったよ。

外を見ると真っ赤な夕陽が沈んで、星がチラチラ光ってる。

「そろそろ帰るぞ」

「おーけー」

ここで早坂くん達ともさよならかぁ。

まぁ、明日もここに来るだろうし、感傷に浸るほどでもないんだけど。

やっぱり少し淋し……くなんかないんだからね！

だって私、向こうでだって一人だったし！

自給自足できてたし！

子分に置いてきぼりされたこともあったし！

前の学校なんか友達いなかったし！逆に避けられてたし！

だから淋しくなんて――

「真冬ちゃん！」

淋しくなんて、

「また明日！」

ないわけあるかぁあああああ！！

「女神ぃいいいグヘッ！！」

最後の最後でラリアットはきつかった……

るんたるんたるんたった。

今なら空でも飛べそう！

「おい、落ち着けよ……」

「フフ、何をおっしゃるのかしら？私はいつでも落ち着いていましてよ！」

「だから何キャラだよソレ」

だってさ、だってさぁあああ！

（裏声）『真冬ちゃん、また明日』なんて、女の子から言われたことなかったんだもん！

これはなに？
友達？そう友達！これが友達というやつなのね！

きっと明日は、
『おはよ、真冬ちゃん！真冬ちゃんがいなくて淋しかったよ、真冬ちゃん』と“真冬ちゃん”連呼してくれるに違いない！

「あー幸せぇ……」

「はいはい、良かったな」

「てことで一護くん」

「あ？」

「今日は私が夕飯作ってあげる！」

こんなにいい日なら、あんまり得意じゃない料理もイケそうな気がするの！

「え、でも遊子が」

「さぁ一護くん、君の好きなものは何だい！？」

「チョコ」

「ぶふッ、可愛いもの好きですね！」

「笑うなバカ」

「笑ってないよ！ぐふふッ。他には？」

「明太子」

「なぁる……よし！今日の夕飯決まったよ！！　チョコ明太にします！！」

「なんだよソレ……んなまずそうなもん作るなよ……？」

げっそり文句垂れるけど知ったこっちゃない。

言われなくとも作りませんとも。

だってチョコ明太を一護くんに食わせるのは織姫ちゃんの役割みたいだしね。

ふっふーん！私が天然女神の織姫ちゃんと、にぶちんな一護くんの仲を取り持ってやろうじゃないか！

愛のキューピッド、さすが私！ひゅーひゅー。

「ナニにやけてんだよ」

「ふっ、私に任せておきなさい」

意地でも少女マンガ的な展開にしてみせるんだから。

キューピッド（後書き）

謎ですね（笑）

何が書きたかったんだろ自分は。

これからも、こんな意味が分からない感じで進んでいきます。シリアスな話も入れると思います。

でも基本はこんな感じで（＾Ｐ＾）

次は早坂くん達の話かな。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

眼鏡をキャラ被りとは言いません。（前書き）

「僕は石田雨竜……よろしく」

（（なんか由井（俺）に似てる……！））

眼鏡をキャラ被りとは言いません。

何だかおかしな事になった。それもこれも、全部黒崎のせいだ。だいたい何で全く関係のない僕が二人も引き取らなければいけないのか理解できない。

いや、普通の人なら良かったさ。少しくらい性格がうざくても対処できるから良かった。

「……で、由井……だったか？」

「その通りだ雨竜。よく分かったな」

さっき自己紹介したじゃないか……

それよりも何でこいつは僕をガン見してくるのか。もう一人の黒崎に似てる早坂とかいう奴みたいに大人しくしていればいいものを。

いや、無駄に大人しいが、そんなに見られると気持ち悪い。

「僕に何か用かい？」

「……？　用などあるわけないだろう。俺とおまえは初対面なのだからな」

「……そうだね」

面倒臭っ。

何だろう、白蟻みたいな破面を思い出してしまった。

あいつもあれで凄く面倒臭かった。

「おーい、石田、大丈夫か？」

いつの間にか目の前で手を振る早坂。金髪で不良に見えるがいい奴かもしれない。

「そういえばよ、石田ってなんか由井に似てるよな。眼鏡とか」

「……は、」

「よくぞ気付いた早坂！　さすが俺の忍術を見破った男！」

「そんな褒めることでもないだろ」

いや、まず似てないだろ。

「俺は一種の危機感を覚えたぞ。このままではキャラが被ってしまう！」

「えっ！　石田も忍者なのか！？」

「んなわけあるか！　だいたい全っ然性格ちがうから！　絶対キャラ被ってないから！」

「酷いぞ雨竜！　君はそんなに俺の主になりたいのか！
まぁ俺には雅様がいるからお断りだがな！」

「雅様って誰だよ！　それに僕は君の主になんかなるつもりはない！　勝手に話を作るな！」

「おまえ……！　雅様のことも知らないのか……！？」

「君の基準で考えて僕がおかしいみたいな目で見るのやめてくれるかな」

「雅様を知らぬとは……貴様！　さてはスパイだな！」

「何でそうなるんだよ！」

無駄に疲れる……

何なんだ、この男は……いちいち言うことが危なすぎる。

本当に、厄介事を押し付けてくれたな、黒崎……

「よし、勝負だ雨竜。どちらが雅様に仕えるのに相応しいか競おうではないか」

「お！　喧嘩か？」

「だったら僕は不戦敗でいいよ」

キャラ被りの方はどうでもいいのか。話が変わりすぎて着いていけない。

雅様なんて知らないし、どうでもいいし。そう言ったら憤慨された。何で僕が怒られなくてはいけないのか謎だ。

頭が痛い。

「第一回戦！　第一回戦は脚力だ！
雨竜の家までこれを巻いて走るぞ！」

どこから出したのか知らないが、長い布を手渡された。

何これ、巻くって……

「あ、これ修業で使ったな」

「よく覚えていたな早坂！

そう！　これを腰に巻き、布が地面に触れないように走るのだ！」

「ふうん……」

なんだ。簡単じゃないか。

「由井、早坂……僕から離れないよう着いて来い」

「え、俺もやるの！？」

「ようし！　雨竜がやる気出したところで始めるぞ！！」

由井の顔が凄く嬉しそうで何より。僕の家を知らないくせに競走って言った時点で勝負はついてるけど。

この二人が着いて来れなくても、僕は知らない。

「いっきマスよん。よーい……」

由井……わざわざ浦原さんに頼んだのか。

「ドン！」

その声と同時に、僕は飛練脚を使った。

奴が言った条件を満たしているし、問題はないはず。

「な、何だあれ！　ずりぃ！！」

「ふっ……やはり雨竜も忍ぶ者だったのだな！　俺もこうしてはいられない！」

後ろからバサバサと鳥が羽ばたく音。

今度はいったい何だ！

「貴様が空を飛ぶならこちらにも手はあるのだ！」

気になって後ろを振り向いた僕が馬鹿だった。

数十羽の鳩から縄が垂れ、由井はそれを掴んで、確かに空を飛んでいた。

だが所詮は鳩なわけで。

「あぁっ、やばい時間切れだ！」

由井の重みに耐え切れなくなったのか、徐々に下へ落ちていった。
ちょうど下を走っていた早坂に墜落したのは見なかったことにしておこう。

――――

何だかんだで二人とも意外と体力があって、僕がスピードを緩めたというのもあるけど、無事に引き離されることなく家に着いた。
早坂が顔を輝かせて飛練脚について聞いてきたけど、僕はあれだけの鳩をどうやって捕まえたのかを聞きたいよ。

「やっぱすげぇな！　どうやったら出来るようになるんだ！？」

「……修業」

「へえー。あれか、かめはめ波も出せるのか？」

……早坂はどうやら、少年漫画の主人公みたいに修業すれば何でも出来るようになると思っているらしい。

そういうのは黒崎と話していればいいと思う。

「ていうか、由井、家に入らないのか」

恨めしげな視線を電柱の後ろから送ってくるのやめてほしい。

僕が何をしたっていうんだ。

くだらない勝負に付き合ってやったし、家にだって連れて来てやったじゃないか。

「……敵陣に入れるわけあるか！」

「あ、そう。だったらずっとそこにいればいいよ」

そう言った時にはもう既にいなくて。

早坂と一緒に入って、しかも居間のソファーで横になってテレビを付けてた。

あれ、ここ僕の家だよね。

早坂は早坂で、僕の部屋にあったはずの作りかけの縫いぐるみを持ち出して、

「おまえ裁縫得意なのか？　俺も得意だぜ！」

……

……まぁ、こういうのもたまには良いかもしれない。

眼鏡をキャラ被りとは言いません。（後書き）

久々の投稿……

眼鏡キャラ同士で登場させてみました（＾＾）

実際、忍者と雨竜は全然似てません。由井の髪、茶髪だし。性格もどうしようもない感じだし。

雨竜乙です。

次はチャドと番長かな……

でも受験近いのでかなり遅くなると思いますが。

蓮華の方も更新したい……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8319y/

CHAOS!!

2012年1月5日19時46分発行